

加藤清正の実像

天正17年(1589)の天草攻めを無事に終えた清正は、いよいよ本格的な国づくりに着手します。今回は、清正が領国経営の基礎を作り上げる天正18年、19年頃の動向を史料から見ていきたいと思ひます。

〈12〉多忙な清正

清正の年表などを見ると、天正17年の天草攻めの次は、同20年の朝鮮出兵へと項目が飛び、その間の清正の動向はこれまであまり注目されてきませんでした。しかし、この時期に出された清正の書状を読むと、領主として多忙な日々を送っていることが分かります。

まず、この時期に特徴的なこととして、家臣団の編成が急ピッチで進められています。領主に就任する前年、天正15年の九州攻めの際に、清正が抱えていた家臣は200人に満たない程度でしたが、190,000石の領主ともなると2,000人から3,000人の家臣が必要になりますので、清正にとって家臣の人員、すなわち軍事力の確保は優先されるべき課題でした。領主就任後に発給された知行宛行状を見ると、天正17年8月に大量採用をおこない、翌年以降も度々知行宛行状が出されていますので、朝鮮出兵を前にして相当数の家臣を召し抱えたようです。また、秀吉の指示通り、清正は前領主・佐々成政の遺臣も召し抱えており、その中には佐々平左衛門や大木兼能のような後に清正の重臣となる人物もいました。

このように、多くの家臣を召し抱える一方で、彼らが居住する城下町の建設や政治と軍事の拠点となる城郭の普請(工事)もこの時期における大きな事業の一つです。

まずは、この頃の清正の居所について確認しましょう。天正18年頃から清正の書状が増え始めますが、これらを読むと天正18年の前半は上方(京都・大阪)、後半は熊本、天正19年の前半は上方、一旦熊本に戻った後、10月から肥前・名護屋(現佐賀県唐津市鎮西町)に滞在しているようです。あまり熊本にいないことが分かります。そのため、清正が出した書状は、熊本で留守を預かる家臣に対する指示が多くなります。清正が最も信頼を寄せる重臣の下川又左衛門と加藤喜左衛門に宛てた書状が目立ち、いかにも清正らしい細かな指示が書かれています。

まず、天正18年2月26日の書状で、「堀や石垣の普請については、油断なく念入りに進めよ」と指示を与えています。これは清

正が城郭の普請について述べている初見史料として注目されます。また、同年4月24日に京都から出した書状では、「石くら」や「本丸」についての普請を指示し、「てんしゆへ之はし出来候や」(天守へ渡る橋は出来たのか)という一文も見えます。この橋について従来は、坪井川に架かる橋を指していると考えられていましたが、富田紘一氏の研究により流路が変更される以前の白川に架けられた橋であったことが明らかにされています。以前の白川は、現在の代継橋付近で流路が北上し、市役所付近まで流れた後そこから西へ折れ、現在の坪井川に沿って中央郵便局を経て、長六橋付近で現行の白川に合流する流路だったようです。ただし、書状中に見える「てんしゆ」の所在地や清正が言及している城については、古城の隈本城(現第一高校付近)とする説と、現在の熊本城とする説があり、議論が分かれるところですが、いずれにしても清正が「油断なく進めよ」と繰り返し強調していることから、清正が並々ならぬ熱意で、比較的早い段階から城郭整備に着手していたことは確かです。

また、天正19年5月には細工町の町割を清正自身でおこなっています。町割図を見ると、旧来の職人層に代わって、大坂など上方から移住してきたと思われる商人層が軒を連ねています。家臣の数が増加するに伴い、彼らが居住する城下町の整備も急がれ、朝鮮出兵に備えた軍事物資の供給地としての役割も担うこととなります。この頃、現在の熊本市街地は一大都市に変貌しつつあったと言え、現在の区割や道路の原形はこの頃形成されたと考えられます。

このように、天正18年から同19年にかけて清正は、城郭の普請とそれを中心とした城下町の建設に力を注ぎます。また、天正19年10月からは朝鮮出兵の前線基地となる名護屋城の普請も担当していました。家臣集めや城下町の整備、熊本や名護屋での城づくり、朝鮮出兵の準備など、この時期の清正は生涯で最も多忙で充実した日々を送っていたのではないのでしょうか。

このコーナーは、大浪和弥さん(元熊本博物館学芸員)が執筆しています。

